

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の取組について
～小6「森へ」の実践から～

横手市立十文字第一小学校 教育専門監（国語） 益子 一江

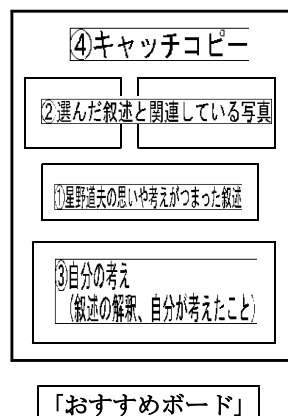
1 指導計画の立案にあたって

（1）育成を目指す資質・能力と言語活動の決定

授業の約1ヶ月半前に単元プランシートを作成し、検討を始めた。児童の実態から育成を目指す資質・能力を明確にし、指導事項を決定した。また、ねらいを達成するために、「星野道夫の思いをおすすめボードで伝える」ことを言語活動として位置付けた。「おすすめボード」は、育成を目指す資質・能力を活用して表すということや読者の「読んでみたい」という気持ちを喚起させること目的とすることを踏まえ、右記のように構成した。（①～④の順にまとめていく。）

（2）教材選定・教材研究

並行読書材は、「森へ」と関連付けて読みやすい図書を学校司書に相談し選書した。単元に入る2週間前から約60冊の図書を提示した。『ナヌークの贈り物』『クマよ』『アラスカとの出会い』（光村図書・中3）は必読とし、全員が星野道夫作品を複数読むことで、共通の情報を共有できるようにした。



2 主体的・対話的に学ぶことができるようにするために

（1）単元の導入の工夫

児童が単元全体を見通し、育成を目指す資質・能力を具体的にイメージすることができるよう単元の導入を工夫した。単元の導入では、星野道夫作品の読後感を基に、単元の課題や単元のゴールを設定した。また、課題を解決するためには、複数の星野道夫作品を関連付けて読む力や、課題についての考えを友達と話し合うことを通して明確にしまとめる力が必要であることを、児童の発言から引き出した。また、「やまなし」の学習で経験した作者の考え方や生き方を知ることによって作品をより深く味わうことかできることを想起させながら学習計画を立てた。

（2）学習の足あとの掲示

児童が単元全体を見通し、育成を目指す資質・能力を常に具体的にイメージし、主体的に学習を進めることができるよう、導入時の流れを再現して掲示した。



導入時の流れを再現して掲示

3 学びの深まりにつなげるために

（1）言葉による見方・考え方を働かせた対話の場を設定

児童自らが「この言葉に着目したい」という思いをもつことが重要である。本単元では、星野道夫の考えや思いを捉えるために、教科書教材の叙述についての疑問を挙げ、話し合う場を設定した。疑問についての自分の考えの根拠は、教材文や他の星野道夫作品の叙述、自分の体験や経験とした。作品全体を俯瞰して読み、様々な叙述を相互に関連付けやすいように、作品の文章全体を一枚にまとめた全文シートを活用し、根拠となる部分にサイドラインを引いたり、叙述と叙述を線で結んだりしながら、言葉に着目して読むことができるようにした。

（2）対話を活性化するための手立ての工夫

対話の活性化を図るためには、課題設定が重要である。そこで、自分たちが挙げた教科書教材の叙述についての疑問が、星野道夫の考えや思いを捉えるために価値あるものか検討する場を設定した。検討の視点として、星野道夫の考えや思いが想像できるものであることや、多様な意味をもち、様々な叙述と関連付けながら考えられるものであることを確認した。疑問を解決する際は、同じ疑問をもった者同士のグループで行った。机上には拡大した学習シートを置き、常に叙述を読み返したり引用したりしながら、互いの読みの根拠を明確にしていくことができるようにした。そして、発言を類型化したり、気付いたことをメモするよう指示し、互いの共通点や相違点に気付くことができるようにした。机間指導の際は、事前に把握した児童の考えを基に、話合いが停滞することが予想されるグループには話合いを整理したり、焦点化したりするなどの支援を行い、意図的に教師が関わった。全体で疑問を解決する際には、グループでの話合いの内容を関連付けて考えられるよう意図的に指名した。



「おすすめボード」を読み合う児童